

# 養父母へ感謝の碑

## 残留孤児訴訟の弁護士

旧満州・虎頭に建立



●地元の関係者と碑を除墓する  
藤原充子弁護士(右)と7月21日、中国黒龍江省虎林市虎頭、藤原さん提供

●記念碑建立の旅で訪んだ数を  
手にする藤原弁護士(右)と右  
川千代さん(黒知市)



中国残留日本人孤児の国家賠償請求訴訟に尽力した弁護士が、旧満州(中国東北部)の最後の激戦地・虎頭に日中両国の友好と平和を願う石碑を建立した。亡くなった人々への慰霊とともに、孤児らを育てた養父母への感謝を表現

た。7月下旬に孤児らと現地を訪問、除墓式に臨んだ。石碑を建立したのは、残留孤児訴訟の高知県弁護士団の団長を務めた藤原充子さん(78)。青い光を放つ花崗岩で、黒龍江省虎林市虎頭にあり公園に建てられた。高さ1

80センチ、幅78センチ、奥行40センチ。表に「日中友好・平和の礎」と記され、裏に「感謝中国養父母」と彫られている。満州の荒野にありて生き延びし残留孤児ら鎮魂の旅。藤原さんはこう訴え、7月21日にあった除墓式に参加し

た。地元政府関係者からも参列。お礼に地元小学校にゴンビューター10台も寄贈した。8年に提訴した高知県の際告団は法人。昨夏に残留孤児らへの新支援策の内容が決まり、訴訟に一区切りついたことから、藤原さんは石碑の建立を思い立った。最後、大陸に取り残されたたぐさんの孤児が中国で命を助けられた。養父母への感謝の気持ちと、慰霊の思いを込めた。

だが、どこにどう建てればいいのか見当もつかず、約2100人の全国原告団を束ねた東京都足立区の孤児池田豊江さん(63)に相談した。池田さんの中国時代の同級生らの尽力で虎林市の協力を得ることができた。

虎頭は旧ソ連との国境であり、多くの中国人を伴って築いたとされる巨大な要塞があった。8月20日まで戦闘が続き、立てこもった関東軍の留守衛隊と開拓民ら約7000人がほぼ全滅、いまも多くの人が放浪されている。除墓式では不謹慎なことが起こった。爆竹で祝った後に、二十数匹の白いチョウが近くに飛んできた。参列者は、亡くなった人々の霊がチョウに姿を変えたように感じたといい、

旧満州のさいはての地記念碑立つ白蟻葬って安らかなれと

旧満州に初めて行ったという藤原さんは「訴訟を通じて同じ年代の孤児の話を聞き、彼らがいかに苦勞したのを知った。今回は歴史を直視する旅になった」。

旅に同行した高知県原告団長の石川千代さん(74)はかつて同じ養父に3回宛られたが「命を救ってくれただけでも感謝している」。「石碑は世代を越えて残る。全国の新で、やっとあの戦争が終わった」と感じる」と話した。

(編集委員・大久保直紀)